

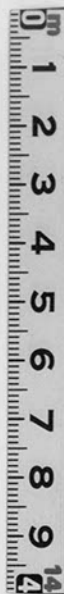
無軌道

号月6

WATASHIWA NASHINDKITO TOMONISODATSU KONTON
SAN NO FUTARINO OKODOMOSAN WO HONTŌ NI
KAWAIKU OMOIMASU.. KATSUWO



KONTON SAN NO UCHI NITE



無軌道・2 號目次

クロボトキン トルストイ マルクス
その他に就いて 【評論】 パルドウキン

● 詩

山の暴風雨
俺たちとは何か
傳令
四月三日
俺達
盛春乱歩
鴉・俺・子供・大
レンズの見た風景
或る素描
街の DESEIN
五人集

● 短歌

中野 勇雄
松本 純一
高瀬 勝男
石川 武夫
島田 春大
横田 卓直
猪狩 満直
馬場 卯一
松村 清
片寄 歌二
宮田 誠吉
島田 丹光
田子 仁郎
珍田 一郎
佐藤 義家

雜四首

● 俳句
高山鸞 追悼句集

● 戯曲
密會者

● 雜記
海ドウ
或るさむらいの話

● 雜記帖

消息
後記

松村 清

十好會同人

高瀬 勝男

石川 武夫

松本 純一

中野 勇雄

松村 清

三野 混沌

クロボトキン・トルストイ・マルクス

その他に就いて

バルドウ井ン

トルストイの無抵抗主義の無政府主義に就いてクロボトキンは書いた。「私はトルストイの仕事の大部分に同情はするけれども私が絶體に一致の出来ないところは彼の思想のなかにある——例へば、彼の禁欲主義、そして彼の無抵抗の主張である。それは何らの理性も判斷もなく新譯聖書の文句に彼自身をしばりつけてゐるやうに思はれる」彼はまた暴力闘争を行はないうで産階級にその特權を捨てるやうに説得することが出来ると云ふトルストイの思想を輕蔑した。

クロボトキンは「哲學的無政府主義者」と呼ばれることに反對して、私は哲學からなく大衆から無政府主義を教つたのだと言つた。そして多くの他のアナキストと同様に、それは單に哲學であつて行動のプログラムでもなければ大衆の闘争に根づいた運動でもないと言ふ牽強附會の説に反對した。「哲學的」だなんて言ふのは冷淡すぎ、尊嚴すぎ、溫和すぎ、本と書齋の香りがあふ。

アナキズム又は無政府共產主義の考へは不運であつた、ミシエル・バクーニンによつて見出される。アナキズムは——強制制度である××の廢止——と言ふ點で一致する。そして諸種の分派はその差異を強調する。彼はアメリカのベンヂヤミン・タツカーとか、ドイツのマックス・シュタルナー等の「個人的無政府主義」を經濟制度に革命的變化を來さずして個人の自由を得んとのみしてゐる希望なき觀察であると考へた。クロボトキンは屢アナキズムの指導原理であると誤り考へられてゐる個人主義に就いて述べてゐる「個人主義は狭く利己的であつて、何人をも感動させることではない。そこに偉大さもなければ、また把握力もない。個人、最も高い、共働的な、社會的努力の

なかでのみ最高な發達に達することが出来る」。彼はニツチエの個人主義「大衆を壓迫してゐる時代ののみ」

存在する、そして事實に於て「壓迫者又は被壓迫者」と同様に個人を破壊する「ニセ物」であると呼んだ。イブセンに就いて彼は眞實の個人主義の考いを懷いた。たつた一人の作家ではあるが惜しいかな、それを判りと了解出来なかつた」と考いた。フランスのアナキスト、銀行と貨幣との再改による革命的經濟的變化の「相互派」の鼓吹者、ブルードンを實際的でない夢想家と呼んだ。

クロボトキンは強權主義のいろいろの形式に對する休みなき反對の外は、例へばマルクスの追隨者のやうな、強權社會主義を不變の幸福と考へてゐるやうな連中に對する外は彼の見界の相違を書かなかつた。

主義の上の反對のみならず、クロボトキンは、かつて會つたこともないマルクスに、主にバクーニンに對するマルクスのやり方に對して個人的な嫌惡を懷いてゐた。マルクスは一般に知られてゐるやうにバクーニンはロシアのスパイであると言ひ誤つた評判を擴めるのを助けた。その上ジョージ・サンドの家でマルクスに會つたときに、マルクスはバクーニンを愛敬よく迎へた。クロボトキンはこの鼻持ちならぬ偽善に耐えられなかつた。此の感情はコンシデランの一字も餘さぬ泥棒をやつた「共產黨宣言」の發見でより強められた。クロボトキンはマルクスを輕蔑するのに子供らしい喜びさい感じた、そして陣笠と彼を罵つた。

(未完・土方譯)

山の暴風雨

中野勇雄

へんな雲が一つ出たと思つた
もう山は暴れ出した
暴風、氷雨、暗鳴、尖光
あらゆる岩石は飛散し
あらゆる木々は折裂かれ
俺達自身の現實は一寸先きつきりしかなかった
飛ぶものは散じ
崩れるものは崩壊し
流れるものは奔流して
あらゆる狂暴、山の暗黒の遂行——
その一瞬後
俺達の見たものは何だ
目を疑ふ新しい世界の展開！
鮮新された空氣、陸離たる大きな太陽
あらゆるものへの自由なる解放精神
これら眞に山の本体を知るもの、享くる快悦
今こそ！俺達の自由なる世界

山の突變の後にくる更に輝かしい展望と
人間的なる相愛雰圍氣とに
俺達は大きな大きな呼吸をした

おれたちこは何か

松本純一

農奴の手枷も
工奴の足枷も
君の忘れた記憶につながつて
苦しみ、闘ひ、生きて
人間色の兵糧を喰盡してきたのだ
君は、その目もあてられぬそこらあたりを
澄まして通りすぎたのだ
君の頭文字で形造られた一本の草木でも
もはや、君が所有しやうとする俺たちではない
たと君に残された仕事といふのは
ブチブルジョワの完成だ
行き給へ

傳令

高瀬勝男

最早や君達は起たねばなるまへ
非常なごとくよそおつた革命が
君達の兄弟と力強く
眞實なるものに
そのはりきつた胸を波うたせたのではないか
聾者の如くからだした
君達兄弟よ

鉄砲製造人よ

口輪をはめさせられて

おいまくられる農民達よ

ハンマを握つて

鋤をとつて

君達の戦線に死守する

おゝ おらが兄弟達よ

炭坑夫

永い間の獨裁權力が

君達の縛を 忤を 娘を

まつくらい泥穴に陥しこんだ
娘を淫賣婦に賣つた舟方達よ
來たではないか
來たではないか

革命成就の傳令が
みちばたにばかんと職を奪はれた立ん坊達よ
もう忍従の犬ではない
もう養ひ殺される羊ではない
兩眼をぐつとはみだして
卑怯者を笑つてやれ

四月三日

石川武雄

寂しく椅子にかけてゐると

硝子戸の外を

風が通り過ぎて行くのがはつきり判る

×

×

風は

軒並に立てた日の丸の旗から生れる

おれ達

島田春夫

何年も何年も

俺達の兄弟は奴らの機械だつたのだ

油臭く、汚れた工場に追ひ込まれ

そこで俺達の兄弟は、ぶん廻され、打のめされ
ぼろ／＼に磨り減されて鉄屑のやうに

捨てられて行つた

憤怒する感情はみんな奴らのカラクリに
紛碎されて了つたのだ

だが、俺達は知つてゐる

俺達の内を駆けめぐる旋風のやうな烈しい
力の充滿を

氾濫し渦巻き叫び打震ふこの感情

俺達は先づこの手械を投げすてろ

口を喊されたこの猿轡は脱ぎとれ
俺達は行くのだ俺達は十字架はあらゆる破壊と
自由の中にのみだ

盛春乱歩

横田卓造

櫻の花が

意外な爆發を見せる迄

淫賣婦の肌のぬくみのやうな

空気のよめきと

アルコール漬の浪籍者が

蟹のやうにつどりよる迄

俺は

ドブ水の中に浸つてゐなければならぬだらう

時が過ぎて

辻々の警官が居眠をする頃

俺もそうした群集中の

一員となるのだ
うかれ男

うかれ男

バカッ……馬鹿々々

櫻の花がに霞見える迄

ヨロケテ……ヨロケテ

夕暗と一諸に歸るのだ

ウム……

「今頃迄どこをうろついて

ゐやがつたんだ」

古くさい

雷のエリキを感じた

—四・六—

鴉・俺・子供・犬

猪狩満直

アラ、ガスガヤツテキタ

トウチヤン

アラ、カラス、アラ、アラ

キタヨ、カラス、カアチヤン

おらのこどもはガスとカラスに敏感だ

ドン

ドオオオン

おらの子供が根かぎり聲かぎり

と犬がワラワラばえまわる

エスもカラスに敏感だ

おらとこどもとエスとカラスに神経質にされた

羽根があるのかアね

ブエと木の枝に飛び上り

オガガ、オガガオ てめつこくね

亦 盗みにくる

おらと子供とエスと

今日もいちんちガスん中でカラスばえした

おらの四ツのマコトは

カラス來つと

もう泣聲を立てる

ワルイカラスダネ

トウキビヌスンディクンダネカアチヤン

ドン

ドオオオン

レンズの見た風景

馬場卯一郎

うつとりと

露が月を含んで

夢に自失する湖

波紋ひとつ揺れやうとしない

静寂さである

真四角なホテルの

幾つもの窓から

濡れたい燭光が

深かあい 深かあい展望に

呼びかけてゐる

ある素描

松村

清

鏡面は鋭い凝視を投げてゐる

足底に冷めたい朝

噴霧する苦笑をふてぶてしく貼りつけ

俺は帽子をのつけた

×
むくんだ下脛に朝光がすべつてゐる
×
その真下に

×
もろこしの怠倦がズキンと音を折つた
×
目茶目茶なものが来さうだ

×
俺は無中になつておつかけた
×
どことも知れない 野つ原の様でもあつた

×
ひどい風がつつ走つてゐた
×
おびたしい鶏の羽毛が散亂してゐた

×
かしやかしや俺ののどに一本一本
×
ささりはじめた

×
SとKと犬をつれた彼とそれから——
×
人を殺した夢

×
ボロボロ歯がくすれ落ちる夢
×
俺を追跡したのは

×
KとSと、犬のむき出した尖つた齒
×
恐ろしい夢はカラッと云つて了ふものだよ

街のデエザエン

片寄耿二

或る日

氣まぐれな享樂に泣き寝入つた

感覚が白つちやけたをえつを

與いて呉れたが

血潮の奔流はやがて

大陸氣分の風景を殺さねばいゝが?

だが だが象徴意派のサンブルの

捨場はとうにあの街角で

クルリ踵を返へして

街よ 街よ サンクユ……グット

バイ

巨大なる噴満の壺を抱いて

「つかもうよ……意識はどうだ」

「だけれど其れでは世界苦の解剖實驗
臺に立つタイプは未だ貧しい——」

い曠原の黒土を踏んで駆けやう——
おゝ……

氷點地帯のテプールに伏した

思索の吐血を

世紀の手が かき廻す——

おゝ曲線に陶醉する土と木と草とを
俺のプアーな掌に載せて

街の DESEIN——街の土を光線が
ゾロ／＼俺と共に歩く

密 會 者

此の劇に於て如何に女が淺薄で金に買われて自分の貞操を精神を豚と等しいものにしたか、兎も角其處には女が經濟的生產的立場に於て不利であり、又社會が女達に向つて取つた態度は女は社會的機構を維持するに純粹な個性がないとして服従と克從的な犠牲を永い間男子から女達の頭に刻みこんだ依つて女達のブライドを隠蔽された故もあつた。

女はやつぱり女だつた。

女によらず男達だつて誰もが金持でありたいといつた。

土地もちで貴族でありたいと願ふた女ばかり攻めるも酷だが、女の立場をきめられなかつた。更へて謂へば、女のもつ全部の能力を發揮するに世界は常に罵罵と強執とで帶積された不自然な周圍であつた。この環境を意味づける男子にも女の人格はガタクツであつたにちがいない。

女を愚弄し、嘲笑し、玩具し賣買して享樂を續け

る男達に當然眞實の戀愛があるか。

以前妻君であつた女を彼は金でひきつけて權力でこきをろし我理無理に、獸慾を充たしてゐた。彼はいふ女は自分の所有だと。

考へてみなければならぬ、戀愛の享樂に酔つてゐる時、今一人の男(○○)は如何にして彼を復讐するかを考へてゐた、それが自由と、生命をもがれた歡喜を掠められた第四階級の正當防衛であり攻撃であると知つた。

戀愛は別だと強辯するかもしれない、自由意志に依つる任意結合が戀愛でないかと

併した、經濟的、政治的、社會的不遇からいつもうかばれない第四階級の家庭的女を一片の金貨で所有するに彼は、貴族であり資本家であり主人であつたのだ。

彼女がもしか反抗をもつ場合に裁判官となり暴君となるに都合よい××を、監獄を××をもつてきた、總ての殺活權を握つた何世紀かの間この地上に意の儘に親から孫へと譲られてゐる特點をもつ彼だ。

そうしてこれは絶対に胃すことの出来ない神聖なものと刻印を押して彼等の都合のみの××社會が作られ、濶みある人間社會を破壊した。

彼等は自分勝手に人間を制裁し、支配し、人の妻君をおびき出し、嬰兒を墮胎して單なる法律上の罰きりでそれですんだ彼等はそのつぐのいを彼の關係して會社から銀行から××から要求することが出来た。

罰はけつして、罪でない、と、
彼が女を口説いた時美しい神の吐く言葉をならべた。

わしは悲惨な境涯にある人達を救うといふことはかなりの愉快だ、すこしでも救つてやる
ことがこの地上から不幸なものを根絶する人道的奉仕だと

またいふ

安心ちかしい君達に握らせた金貨はけつして泥棒して詐欺して取つた金貨でわなない……
また慈善を意味するものでもない
なんとすれば君達は理由なく金貨を貰うを拒

む人達だから

これは天からあたへられたそして實に尊いわしのそして神のおめぐみなんだ遠慮することはいとつておけ

というのだ

女の財好心を充分にそゝりたてゐるのだつた。

女はこの同情に推理と洞察をもちあわせない單純なものであつた。先づ女は狭められた慣性をうごかして彼を信頼する、それが尙其の日暮しの自分等達労働者の不幸を思つてか

● 舞 臺

二本の圓柱筒がある

左の圓柱筒から馬蹄形の鐵板が空間を飛翔してゐる

馬蹄形の決定的方向に

星一つ

舞臺、薄明

右圓筒柱にのみ影をあたへる

背景は灰色の幕。この劇の進行中たへずピアノの高い音と底い音を不規則に打ち續ける潛伏と混迷をあらわす

左圓筒柱の直下に抽象的人間2

〔圓筒を背おう様に兩手を圓筒にまきつけて頭を垂れてる〕

右圓筒柱の投影された影の先端に抽象的な人間1

左舞臺裏から紳士登場

直角に歩行する用心深く狡猾的な

とすぐ右舞臺裏から瘦せたナツバ服をきた

労働者右手に可成鋭いメスを握つて登場

兩圓筒柱の二歩位後と右圓筒柱の方によつて

執情を自制してゐる態度、

女登場

化粧して逢引にふさわしい格好

以前紳士わもつてきたステッキにて、自分の周圍に素早く圓を書く——（この圓は國家を意味し絶對的たらしめたものと紳士は信じてゐた）

女圓の外まできて躊躇

媚態を作つて許可をまつ間立つてゐる、すぐ男と抱擁する

この時間即ち抱擁してゐる時間を右圓筒柱の影に在る抽象的な人間1で計算する

（これは1が影を踏んで可成ゆつくりと無表情にそれてゐて充分人間の全格を示す、圓筒柱に向つて歩む 完全に1が柱にびつたりくつついた時）
労働者躍りこむ
二人を殺す

12死體を運ぶ
左舞臺裏より

辯護士、
裁判官、登場
僧侶、

労働者殺人の場所に未だ驚きしめぬ感情をもつて興奮にふるへてゐる。

労働者『永い間の忍従が今此處で爆發した

裁判官 辯護士 僧侶

お前らの諛辯が俺をしてこうまで勇敢にしてくれたのだ

これが最初の復讐だ

ソッハッハハッハ……

二幕 以前と同じ
舞臺全體が明るくなると

繰り出された労働者が舞臺面に、左から出動してゆく
元氣に精一溢のはつみをつけて舞全體を緊張させて、

全部

「今こそ俺たちの自由がきた

俺たちの血でもつて、偽善をぬぐい

害悪をはびこらした、彼等の要塞を俺たちの

心臓で粉碎しろ」

幕

舞臺裏で合唱

「おゝ町へ出ろ

町へ出ろ

労働者、淫賣婦、

彼等のロチツクはあやまりだ」

×何べんもくりへす

高瀬 勝男

一九三七

作者註

出来ることならこの無言劇の最後觀衆を興奮させる爲資本主義のキャラクターを暴露した宣傳文を撤布し威示運動を劇場から市内へと遂行したい

海棠

石川武夫

空地に普請が始まつてゐる。天氣の良い日は朝早くから斧の音が空にさえて、鋸を引いたり、のみを打ちこんだり。
一日、鬱陶しく雨が降り通してゐても、大工は働いてゐた。夜、暗い窓をあけて眺めると、散亂した普請場の前に、海棠の花が雨に濡れて咲いてゐた。

家の前に、夜見ると葉裏がぞくぞく白くなつて見える木がある、氣味が悪い。

高架作業をしてゐる。

葉櫻。

淡い夢のやうな三日月。

街は夕陽に、半分赤く彩られてゐた。

蛙が鳴くようになった

月のない暗い夜、地の底から湧き上るやうな聲を聞いてゐると、こうして生きてゐられないやうな妙な焦燥に襲はれる。

春の夜は堪えられない自然の壓迫だ
蛙、蛙よ、草野心平さんを想ひ出す――

夜更けて鳴き出す鶏。汽笛。

夜行列車は遠くから――私の寢床まで地響を傳へる。

海棠の花は雨に映える

或るさむらいの話

松本純一

色づいた土と小砂利から盛り上つてくるいきれに烟ふる山の手の屋敷街、夏といふ眞晝の頃、汗ばんだ影を落して三四郎は樹蔭の裏青い空氣を漁つた。派手な縞柄に吸はれた三四郎の白い肌は日輪の鋭い擲槍をジツクリ受笑つてゐる。だるい傾斜にのんびりと續く屋根の瓦は明るい密雲を呼ん

で低い、時よりひよつと風が戯れてくる。

――と柔かい直線の空氣がグツと伸びた。

三四郎は色めいて背をククツと縮めると同時に左の掌に流れついたのは肉厚い物干棹ではないか

「何者だ」知らずに響かれた聲

「まあとんだ粗相を」からみつく嬌唇の樂譜

三四郎は手許に繰り込んだ棹を心なく息づかせて慌てて振返つた。高い灰色の塙もれた空一隅の火照りが難木に躍り上る。

三四郎の感覺が一時測れかけると直ぐと鮮明な表情が心に融けいり若い女の鰭が濃く匂つた。偶然の想ひ出に女の黒眼勝つた潤ひを三四郎はなごやかな色彩に織りつゝ暗い信之介の死をつかみ出した――薄墨の曉夜、堀端の松蔭に二人に一人の争ひを魚の腹がこぼれるやうな劍の火花にみつけた、三四郎は馳け寄つて土草履を蹴つた。ボトン、濁音、續いて石垣の軌る微響、知らずか三四郎は前脚を曲げて襦袢を探つた。三秒斷續、濡れた物體が背後へヨロツと抛げらるゝ三四郎は肩を斜にひねつて黄色い擦音で鯉口を切りはなした。

力なく倒れる相手をみすかしつゝ血糊拭く紙片を手で揉んだ、間もなく中指の骨節が小さく鳴つたそして躰んだ「相手の顔が」焼きついた瞬間「アッ」と三四郎の軀がよろめいた。
刀をたばさみ、刀の良心にさむらいのガイライを強制された不自然な態度に淡い悲願と反動性のない卑屈に怖え出した頃の自分の友、信之介が青剃立つた處女の豊頬とあり九い眼の顔である。
「忘れるもんか」無門三關の挽歌が痒く痛んで頭に沁り落ちた松葉の鋭さに夜のただならざるに氣づいた三四郎は闇に這ふ鳥のやうに堀端をはなれだした。揉まれた紙片が丸まりつゝ馳けつけて三四郎の背中を白く嘲つてゐる。たまらずに走りだした。――若い女、それはあの信之介を知りその妹小夜子をおぼろげに組立てた彼女である。

伏目な、餘りに型どられた慎重さに或る物足らぬ女をソツと吐いた小夜子は近寄つて亦軽く寄り三四郎の顔を見上げた、美しい肉塊をはむやうに三四郎の手と手がのる丸い肩、小夜子はときめく儼安に素足の貝殻を揃へた。

静かな街、浴衣の背づれを面たてて髪が多い武士がふたり見過した。

「——それに信之介殿は」三四郎の異常な眼光にシツクリ合ふその態度はむしろ神秘である。

技巧が目立たない、技巧らしいものがその人柄からすり抜けて了う、小夜子の瞳は乾いて覗かれた、感傷の幻想が勃起してない。あの直截な微笑み凄じ程ゆつたりしてゐる。

「三四郎さま、ご存じぢやなくて——兄は横死しました、ほんとに詰らなく——」

三四郎は小夜子と肩をつくらうつて長い堀に沿ふて歩き出した、たぶん中庭のあたりから甘つたるい蘇甘母尼の色香がひた／＼と彷徨ふてくる。三四郎はなるべく不覺な驚愕を敢てしやうと欲しなかつたので息を止め強く胸を張りいどんで動かない風景を小夜子の見慣れない顔に或る素描をうまして——もう男女は墓標のある盆地を歩んでゐた——何か痞へて吐き出せない小夜子の繻子の小窓をうかがつた、動くたび弾き合ふかや二顆のふくらみ、「熱れたナ」三四郎は妙に上づる氣持を

どうしやうともなく唯あるがままの放情を慈しんだ、「うかがへる自分だ」その法悦を秘かに唱ひながら小夜子の割り冷やかな手首をにぎつて訊ねたのである。

「小夜殿、敵は——」風がない。

「さがそうと思ひます」暗い、

「では、手がかりは——」静々

「手がかり、三四郎様、それだけは仰言らずにただ神に見離される男の運命を妾が拾ふまでですわ」

紅潮する頬白を美しく飾つた瞬時の恐ろしい魅力が執拗にひろがつてきた、復讐 女が熟柿の音もなくおちる時を待まうける麗はしい手招き、何んであらう、戀の巢だ、三四郎は小夜子にひきづられてなす畑の裏へ裏へ見えなくなつた。暫くして庫裡の小者がひとりのさむらいの悶絶した死骸を傍らの水を盛つた天目から發見した。

雑記帖

中野 勇雄

●材料小説又は詩的

●春も深々と朝は明けてゆく。

洲崎の朝は殊に好い。朝靄の中。

Ｄの部屋の障子は白い。空はぼんやり蒼い。

女は煙草をくゆらして濛い眼だ。

眼……向岸の黒い板塀に一人の青年が倚りかゝつて小便をしてゐる。いや小便ぢやない。この

金のない青年はこゝら一帯のふんゐ氣を對照として〇〇をしてゐるのだ。そのはげしい息づか

ひに川の水が揺れてゐる。

女はギョツとした。今歸つて行つたお客のこと

手に残つた銀貨の光り。疲れ、腐れかけた自分

の肉體。内臓いつばいの空虚な瓦斯體。女は力が抜けてゐた。

女の眼は青年から離れなかつた。青年の眼と女

の眼。女は追求を感じた。女は手拭を振つた。

青年は手を舉げた。女は窓に乗りだして裾をま

くつた。

重くらしい海の上に太陽があがつた。

女は失神した。

●イズムに囚はれてゐるイストは何處まで行つても朦朧派だ。結局。

●すばらしい戀愛詩はないか。抒情詩はないか。

●活字のかげらのやうな詩や新聞の經濟欄を読むやうな詩にはあきた。

●變つた茶碗でコーヒーを飲みたい。

●山の小屋の米の値段。單位一升。

●大澤小屋——六十五錢

●鳥帽子小屋——一圓位

●同じくワラジの値段。一足。

●大槍小屋——十八錢

●常念小屋——十五錢

●燕の小屋——十三錢

●鳥帽子小屋——二十錢

●登山口——八錢より十錢

●五月だ。そろ／＼山はいしだらう。何にも考へ

ずに年中山の中を歩いて居れたらいいだらう。

- 今年俺は寡作だ。疲れたのではない。
- 紹介
- エスベラントの研究團體が平にあります。
- 鐵道の俱樂部でやつてゐます。平エスベラント會。今講習會をやつてゐます。
- ジャパン、キャンズクラブ。毎月雑誌キャンピングを發行してゐる。九ビル内にあります。會費一年六十錢です。
- 詩集「暮春賦」拔川光義君の詩集です。拔川君の人間が好きだから宣傳します。安積郡豊田村北方詩人會發行です。

松村 清

「俺達」は何處へゆく
君達は「俺達」を何處へゆかしめる
「俺達」は「俺達」の重壓に苦しめられやしないか
ゲキレツな吐瀉をマオレツな下痢を欲求する
そしてげつそりした空腹よ、來れ……
自分自身…… 彼等自身……

x

雄蟬が饒舌になつたやうな詩暴風
變體から變體を追ふ混沌世期
もうそこまで「俺達」の踊時代が來てゐる
x
「生命を失ふ」程事程左様に詩にあつての
「？」の存在價值がはつきりした
「詩らしく」歌らしく」なると言ふ妙法派的手法
もはつきりした
模造品は「らしく」より以上ケンキがある。
君！
x
詩・南車、潮、しづく？ 表現人、無軌道この位で
いいでせうか
詩・歌・ギョク類の生産過多で市場が混亂して
ゐる。
x
混沌氏の梨の花が盛りだ、いちごも咲きだした。
いちごのみのる頃混沌のいちご畑で詩の會歌の會
のやうなものを催して見たい。お節句頃今から同
好の人々のご賛同を得て置きたい。

通 信

「朝鮮に來てから何んとかンヤリして今日まで書く事も
む事も出来ませんでした。仕事としては内地に居た時のやうに
忙しく飛び歩かすも好いのであまり存氣です。プロやうな
感は少しも無い（外感です）金は相變らず無いにしても食ふ
だけは心配は無い、内地に居た時より飯はうまい肉も食へる先
は安着一報」
（妻本泰治）

「俺は北海道で死ぬかもしれない、話す友もなくそしてひとり
ぼつちである事は耐れないやうな氣がする。俺は迷ふてゐたが
とうとう五月に入つた、このどたんばでどうすることも出来な
い體で、一町歩ばかりひつくりかへしてみたら、明日はビート三
反歩はかしまくと思ふてゐる。今日は隣のなまいた。三反歩五
時間中かゝつた、一休みもせず一氣にまいた、俺はまくびとだ
つた、里數にすれば約一里半、背中が少し痛い、朝三時に夜が
明ける、四時に起きる、馬の世話に一時間、五時半に飯食つて
六時に仕事にかゝる、畑おこしなら一日七反歩やつける。九
時に一ぶくやる、十二時に晝飯、午後一時半仕事にかゝる小晝
飯なしで午後六時までやる、それから馬の世話に一時間かゝる
七時に夕飯食ふ、風呂に入つて床にもくるのは八時だ、手紙も
詩も、新聞も雑誌も感想もあつたものでない、一本のぐたぐた
につかれた棒切れ同然だ、一日十三時間の労働だ、外人達は
もつとかせ、朝たまご二つ肝油少量、夕にたまご二つ飯の他

に、それだけ食はして貰ふ、そしてやつと生きてゐる。朝鮮か
らなつかしい手紙來た、俺は泣いちゃつた、みんな最後にけう
ばにされる、議會政治支那出兵、ハハハなる程馬がゴリゴ
リワかいばかんでる音きこえる。あ、れむたい駄目だ。
（猪狩滿直）
x
「すつかりごぶさたをしてゐます、たまにお便りを書いても落
ちつかず、疲れてゐるもので、ゆつくり話せませんでした。け
れど疲れ切つて、午前の一時期、阿佐ヶ谷の駅から私の家迄
のくらしい路で、きつとあなたや、あなたを圍んでゐる人達や自
然を思ひます、そしていつも元氣になるのです。この前のおハ
カキに詩は書きたくない、百姓に話しかけるやうなものが書き
たいとありました。それをよく味つてゐます、私は又別にかゝ
るものを欲してゐます、仕事を下ささい、あなたに又ゆつくり
という／＼なことを話してもらつて、啓蒙させて貰ひたく絶
えず思つてゐます、私自身も苦しい思索と仕事とに壓へつけら
れ乍ら、たち上つてゐます。
（土方定一）

「愛妻を得て至極幸福に生きてゐます、虚無の虫が不思議にと
つかへ姿を消してゐます、若い娘はそして故郷から送られた娘
は矢張り、所がある、まづ鼻の下を長くしておきませう、私
の生活はだん／＼藝術へ精進する心さ道のいてゆくやうです。
私は科學に生きた方が得のやうです。」
（小林直人）
「神戸から東京への汽車の中十日間關西をあるいてかへるとこ
です、すばらしい計畫があつたのですか」
（草野心平）

SEINRAMO

(Mukido)

Monata revuo de literatura arta en Japano reĝono
eldonejo: Nukidosa
Marutomo soten no 27, 40me, Tajira, Hukusimaken
no. 2 majo 1928

発行兼編輯人 三野 混 沌
福島縣石城郡好間村北好間字上野九〇
發行所 福島縣石城郡平町四丁目二十一
マルトモ 柴 田 書 店
印刷所及印刷人 福島縣石城郡平町仲町二〇
二葉舎 熊 謙 次 郎
昭和三年五月三十日印刷納本
昭和三年六月五日 發行
【定價金二十錢】

『表記の處へ先月中旬やつて来た、過日妻木君を東京驛に送つた、奴も遂々行つちまいやがつた、カラシ種の様に野は小さいが一つからげの荷物と一緒にワケもなく飛んで行く彼は一寸大きい、これから五層倍も苦勞するだらう、別れの酒を飲んだので日本一の元氣で萬歳やりながら立つて行つた、然しおやじの心はたまらなく苦しく寂しいだらう。』
(猪狩一馬)

無軌道消息

高山鶯鶯氏の死を悼む
鶯鶯氏の俳句は氏の頭の中に入つてゐるやうに入つてゐた構成された句は氏の人格と同じレベルをもつて高まつていつたことを僕達は嬉しく思ふ、家庭は不幸であつた、然し同人派の氣持ある俳人として中間から愛され尊敬されてゐた、妻君冷子氏も同じ道を歩んだ二人は可なり自由な生活をやり通した、一人は死に一人は狂した生活は俳句の街道の上にあつたやうなものだ、それはさうだがその他も一つ識らなくてはならないと思ふ、讀者さふ仕事、その困惑を逃れて百姓にでもなりたかつたといふことだ、冷子氏は何度が僕をたづねたが僕は何も話さなかつた、鶯鶯冷子はいつてもかきむとり度い氣持で生きてゐたことへ亦そんな複雑さから俳句に向つていつたことな、鶯鶯氏の絶句とみるもの二つ

寒月や坑口露を吐きあぐる
足暖め桶の走りも快く

高瀬勝男氏、城山にて百姓を始めた、物がかゝつてかゝつたたけしとれさうがないといふてゐる、それでも百姓は止めないとやつてゐる。
妻木泰治氏 朝鮮群山市外不二農村字福島へ移住す
小村直人氏 先々月二十五日妻を娶る
故山村暮島氏 暮島詩集厚生閣から出版された、猶『海の旗』をドワラ社から近刊さる。

無軌道社内新設二部

造型藝術部 (第一回作品展九月)
國際語エスパーント研究部

受贈雜誌詩集その他の圖書感謝す

投稿規約

- 一、會員は機關誌發行支持費として毎月金三十錢を原稿と同時に納入のことに同意し、原稿は各種可成一篇主義、但し和歌、俳句等は數篇を掲載すること可
- 二、原稿は各種可成一篇主義、但し和歌、俳句等は數篇を掲載すること可
- 三、内容詩、和歌、俳句、小説、戯曲、童話、電話、評論、研究、感想等
- 四、宛名平町四丁目廿一 無軌道社内 編輯部
- 五、締切 毎月十日住所姓名を明記のこま(原稿と別紙)
- 六、編輯は編輯部に於て擔ふ

編輯後記

すぐ二號を刊行するつもりでゐて、いろいろの事情でわくれて今になつたことを讀者諸君にすまないと思ふ、次號は又充實したものをだすめい、仕事らしい仕事にとりかゝつて鐵の生活のやうに僕達は共同出来るやうな氣持がする、共同のない種族は此の地球から亡びて終ふのだ(混沌)

9

K.MOROHASHI

マルトモ

文 雜 書
具 誌 籍

平町四丁目
柴田書店

【定価金三十錢】

昭和三年五月三十日印刷納本
昭和三年六月五日 行